・ザウエルの匣(はこ)

・　1

サンザイス・ザウエル・ゴーズは、社長室に併設された自分だけの研究室で目覚めた。
「いかんな、眠ってしまったか」
ザウエルは自分が横たわっていたソファから起き上がると、作業途中だった簡易プラント装置の方に足を向けた。
「うん？」とザウエルは頭をおさえる。頭の中で誰かが叫んでいるような妙な頭痛がしていた。このところ、経営と研究の両方を無理やり並行して進めていたため、体に無理が来ているようだった。
実験の続きを続行しようとしたが、この調子では、今日は作業を続けるのは無理だろう。稼働中のプラント装置を止め、帰宅の準備に入った。ソファの上もかなり乱雑だ。
資料を片付けようと隣の社長室に戻った。大型デスクの上を見る。こちらには、化学部品企業ザウエルの実務的な資料が山積みだ。
机の上には自筆で「スパイに気を付けろ」と走り書きが残されていた。
「しまった。こんなメモを出しっぱなしにしてはまずい。何をやっているんだ、私は」と、ザウエルは思う。
もう何年になるだろうか。ザウエルは反宇宙政府の活動に極秘裏に協力していたのだ。

汎宇宙統一宣言が行われて以来、亜空間サウザーによる大型流通経路があらゆる取引の主流になり、偏在宇宙間での小取引は、大きな痛手をこうむっている。
この状況をなんとか打開するために、ザウエルはサメノ星域の独立運動組織サートに、自社のウェイザー光源ユニットを供給していた。　ウェイザー銃は火器としてはさほど大きな威力を持つわけではないが、地域自治には欠かせない。自警団としての火器の取扱いにまで政令を発布する汎宇宙政府の方針には、各星域ごとで反発の声も大きかった。
「自治は星域の誇りだ」とザウエルは思う。そんな誇りまで捨てろと迫る汎宇宙政府の方針には、心底腹が立っていたのだ。
しかし、その違法な行為を暴くために、わが社にスパイが潜入する可能性があると、独立運動組織サートのスタッフから連絡が入ったのが、うとうととする前の事。対策をどう立てようか考えていたところだった。
情報によれば、スパイは死体の意識を通信波で乗っ取り、その人間が生きていた時のように活動して情報を収集するという。サートのスタッフからは、工場内での事故、社員の身内の事故などに注意を配るように促されていた。
「死体に入るとは…」
宇宙警察の技術はかなり進化しているようだと、ザウエルは技術者として感心したのだが、事態は急を要した。違法生産でウェイザーユニットの秘密が暴かれては、会社そのものが消え去ることになる。それでは独立運動どころではない。
と、その時、重厚なドアを、せかすようにたたく音がして、「ゴーズさま、ゴーズさま」と心配そうな声が聞こえてきた。聞き覚えのある声…、ああ、秘書のユアンスだ。な

ぜすぐに思い出せなかったのだ？　ザウエルはすぐにドアを開いた。
　そこには小柄なトード人の老人が立っていた。心配そうな表情でザウエルを見ていた。
「大丈夫でございますか？　何か大きな音がしたように思いましたが？」
「ん？　ああ」と答えて、やっとザウエルは思い出した。プラント装置を反応側に作動させてそのままだったのだ。おそらく最終反応のリアクト暴発音が多少大きかったのだろう。この実験では、三度に一度程度、軽い暴発が起きるのだ。
「大丈夫だ。スウエンド反応のテストだよ。心配ない」とユアンスを安心させるために答えた。
「それなら良いのですが」
「用はそれだけか？」
「いえ、実は例のユミアミの島からの定時報告がないのです」
「なんだと？」
　ザウエルは嫌な予感がした。ユミアミの島というのは、極秘裏に生産しているウェイザーユニットの生産拠点なのだ。
　ウェイザーユニットはウェイザー光源の根幹部品であり、別名「ザウエルの匣」。独自に反射角を計算した反射鏡を、数ミリ各の箱の内面に刻み付け、その箱に特殊なガスを封じ込めることで通過する光の共振波長を高める部品だ。この部品なくして、一台でランタンから麻痺銃、サバイバルナイフ、レーザー光線銃、散弾銃にいたるまで多機な機能を備えるウェイザー銃は作れないのだ。
　まさかその事が宇宙警察にバレ、いきなり現場を取り押さえられたのではないか？　そ

んな最悪の想像が働いた。
　その時、ザウエルの卓上のヴィディホが緊急連絡の音を鳴らした。これは、ユミアミの工場長ナミゴートの携帯ヴィディホ直結の緊音だ。
「ザウエルだ。どうした」とザウエルが応える。
「私も、ご一緒して、よろしいですか」とユアンスが同席を求めてきた。
「ああ、いいとも。一緒に聞いてもらった方が良さそうだ」とザウエルは緊張した声で答えると、同時にヴィディホの上に３Ｄ映像のナミゴートの姿を映し出した。
　ナミゴートはトカゲのような肌をしたロマネ人。ロマネ人特有の粘り腰と誠実さで、長年ザウエルに仕えてきた大切な右腕だ。しかし、映像のナミゴートの肌は煤で黒くなり、ロマネ人の面影も感じられない。通信画像全体に煙がたちこめ、３Ｄ画像もはっきりとは映らない。
「ザウエルさま、申し訳ございません。全生産ラインが、ほぼ壊滅状態でございます」
「なんだと！　どうしたんだ」
「原因はまだ掴めていませんがどこかでホスフィロムＳＳに引火したようです」
「みなは無事か？」
「…いえ。私と、シニエル、サンだけは管理棟におりましたので九死に一生を得ましたが、第一ラインから第四ラインまで、おそらく十二名とも爆死したのではないかと…」
　ユミアミでのウェイザーユニット工場は、各ラインにリーダーとサブリーダー、ラインチェックマンの３人態勢になっている。あとはロボットたちがセルスタッフとして、四十台から六十台の間で運用されている。

「スウェンド反応の暴走のようです」とナミゴートは、実に悔しそうに報告した。
この数日各ラインでスウェンド反応が非常に遅く、生産効率が著しく落ちていたのだ。
ザウエルとナミゴートは、この原因不明の状況に、通常ならホスフィロムＳＳの供給量を増やすところを、逆に供給量を減らし、その代りに反応炉の工程を強化する対策を取ることを二人で相談して決めた。しかし、その対応策が裏目に出てしまったようだった。
「なぜだ？　リアクト強化をしても、引火するような濃度にはなっていないはずだ」
「そうです。そのはずです。安全なはずなんです。なのに…」
ナミゴートはスタッフを失ってしまったことに大きなショックを受けているようだった。責任感の強いロマネ人にはあまりに酷な出来事だろう。
これはいったいどうしたことだ？　とザウエルは訝しげに眉をひそめた。こんな事が起きるという事は、生産環境のどこかで想定外の出来事が起きたとしか考えられない。それはもしかしたら、宇宙警察のスパイによる、作為的な事故なのではないか？　事故が起きた後なら、誰かが死んでもおかしくはない。そして、その死体に入りこんだスパイが我がゴーズ重工の、いや、独立運動組織サートと関係のある私を政治的に「亡き者」にしようとしているのかも知れない。
ザウエルは、その厳しい顔を、より一層引き締めて、次の命令を指示した。
「とにかく生き残った者全員すぐに戻ってくれ。ユミアミの処置はその後で考える」

2

数時間でナミゴートとシニエル、サンの三人が緊急脱出艇クエンティで戻って来た。
ナミゴートはかなり精神的にショックを受けていたようだが、事実関係をまず最初に報告した。それ以上の事を聞いたり依頼したりできる状態ではなかった。ナミゴートがスパイという可能性も考えたが、事故時に死亡して入れ替わったとすれば、リアクト強化の話にすぐについてこれはしないだろう。ナミゴートがスパイとは考えにくい。精神的ダメージがかなり大きい様子だったので、とにかく休むように指示を出した。こういう時に休めないのがロマネ人の弱点かもしれない。
「ユミアミの復旧作業という大仕事が待っているんだよ。君に頼むしかないんだ。だからゆっくり休んでくれ」とザウエルは声をかけた。
ナミゴートと入れ替わってザウエルの部屋に入って来たのは若いトード人サンであった。
「大変だったようだな、タン。けがはないかい」とザウエルは声をかけた。子供のころサンは、自分の名前が言えず「サン」を「タン」と発音していた。それがザウエルとサンの間でのちょっとした思い出になっているのだ。サンは秘書ユアンスの息子なのだ。もう二十五年の付き合いになる。
「おやめください、ザウエルさま。いまそうう気持ちにはなれません」とサンは返した。タンと呼ぶと「もう子供じゃないですよ」と笑って返すというのが、最近のサンとザウエルの「いつものやりとり」だったのだ。この呼び方に適切な反応をするなら、スパイではないのか。いや、相手は汎宇宙を司る天下の宇宙警察なのだ。サンの呼び名くらいは前もって調べているとも考えられる。
「リアクト暴走が始まった時、君は管理棟ではなく反応炉の方にいたんだね」とザウエル

はナミゴートからの情報に基づいて事実関係の確認を行った。反応炉で暴走が起きたのなら、もっとも爆風の影響を受けていたはず。そのサンがいま生きているという事は、すでに死亡していて、スパイに意識を乗っ取られている可能性がないとは言えない。
「は、はい」とサンは少し言い淀んで答えた。
「何か気になることでもあるのかい、サン」とザウエルは、その不安げな様子を見逃さずにサンに重ねて聞いた。
「いえ、実は私はその時反応炉にはいなかったのです」とサンは思いきるように話した。
「どうしたんだい」
「実は、反応炉の強化をナミゴートさんから指示されていたのに、反応スイッチの設定を忘れていたんです」
「なんだって？」
「申し訳ありません。今回の事故は私のミスです」
予想外の展開だった。トード人のサンが反応設定の数値を間違えるとは。
ザウエルは、汎宇宙では標準的なフーマン種に近いフーマン亜種のザン・フーマン人であったが、少数民族であるロマネ人やトード人の精神性の高さや数値に強い資質、ルールを順守する気性などが気に入っていて、差別されがちな、この愛すべき種族を優遇する企業体制を取っていた。
汎宇宙文化においては、あまりに細かい管理手法はかえって効率を落とすと言われており、ザウエルの運営方針は、常識外れだとも言えた。しかし、汎用部品メーカーであるザウエル工機において、彼らの資質なくして成功は考えられなかったのだ。とくにサメノ星

系にはロマネ人、トード人の比率は高く、この地域を愛するザウエルにとっても彼らの特質を活かせることが経営上の誇りですらあった。
しかし、そのルール順守を特性とするトード人のサンが設定を間違えたと言っているのだ。これはいったいどういう事だ。
「サン、君がその手の設定でミスを犯すなんて、私にはどうしても信じられないんだがね。どういう事なのだろう？　理由(ワケ)を話してもらえないかね」
「反応が遅いならホスフィロムＳＳの増量を行うのが定石です。ですから、その設定にしていたのです。しかし、反応炉はリアクト強化の設定をするように指示が出たので、ホスフィロムタンクでの減量を行いにタンクの付近にいたのです」
「いや、待ちたまえ、ホスフィロムの濃度コントロールは管理棟で行える。タンクまで出かける必要はないだろう」
「はい。ただ原因不明の減産が続いておりましたので、供給弁を先に交換しておいたのです。四か所の弁をもとに戻してから反応炉の設定を変えようと思っていたのですが、おそらくシニエルが、それと知らずに反応炉の設定を行ったのだと思います。申し訳ありませんでした」とサンは深々と頭を下げた。
話としては筋が通っている。と、ザウエルは思った。しかし、何か釈然としないものを感じるのもまた事実だった。果たして、こんな連絡ミスが、ナミゴートとサンの間で起こるだろうか？　それはいくら考えてもあり得ないことだった。おそらく私には言えない、何か大きな理由があるに違いない。
いや、あるいはサンこそがスパイなのか？

ザウエルは、甘んじて責めは受けますという態度のサンの姿をじっと見つめた。
「うむ。そうなのか。では、それが今回の事故の原因なのだな」
「はい」と短く答えるサンに、疑問は感じながらもザウエルは下がるように伝えた。
「はい」とサンは部屋から出ようとしたが、ふと足を止め、ザウエルの方へ振り返った。
「ザウエルさま」
「ん？　どうしたね」
「これは事故と関係があるのかどうか分からないのですが…」
「なんだね」
「本社に帰ってきてから、異常な通信波の受信歴があります。かなり特殊なスクランブルがかかっているようで送信元も受信元もわからないのですが。いちおうご報告しておきます」

3

異常な通信波の受信歴。それはスパイの潜入が確定したと考えてよい情報だった。死体を操るのは意識波の強化された通信のはず。それがスクランブルのかかった形で行われているとすれば、やはり誰かがスパイなのだ。
「特定を急がねば」とザウエルは思った。この数時間で決着を付けなければ、ウェイザーユニットの極秘生産の証拠が警察に漏れ、ザウエル工機の命運は尽きる。そして長年の独立運動の成果も露と消えてしまうだろう。せめて、すべての証拠をつかまれる前にスパイを見つけ出してそれなりの処置を行わなければならない。
しかし、とザウエルは思う。次に尋問しなければならないのはシニエルだ。我が息子シニエルだ。もしシニエルがスパイであったなら、私はどうすれば良いのか。会社と独立運動を守りながら、愛すべき息子を失った衝撃にまで耐えなければならない。それが私にできるのだろうか？　妻を亡くして以来、私の生きがいの大きな部分をシニエルは占めている。その息子が死に、スパイに乗っ取られているとしたら。立ち向かうべき現実の重さにザウエルは少しひるみながら、シニエルに部屋に入るように伝えた。
シニエルは、ユアンスに付き添われて部屋に入ってきた。ザウエルと目を合わそうとしないその姿に、何か心にひっかかりがあるのだろうとザウエルにはわかった。
「シニエル。今日はじっくり話そう」と、ザウエルは声をかけた。その一言を聞いて、ユアンスはシニエルの顔を見、「よろしいですね？」と問いかけるような無言の表情を見せて部屋から出ていった。
「大変な事故だったな。おまえが生きていてくれて、よかった。爆風は受けなかったんだね」と、ザウエルはまず事実関係を確認することにした。
「はい。タンクの弁を調整していましたから。多少は距離がありました」とシニエルは答える。
「ん？　サンは、お前は管理棟にいたように言っていたが？」
「え？　あ、ああ、そうです。管理棟にいました」とシニエルはあわてて訂正した。ザウエルは我が子ながら不器用なほど正直なその性格を愛すべき資質だと思った。もともとウソのつけない子なのだ。きっとサンとの間で口裏を合わせる約束をしたのだろう。だが二

人ともにウソは得意ではないようだった。
「おかしいな。サンとお前のいう事が違っている。何か隠しているんじゃないかね？」
ザウエルはやさしい目でシニエルを見つめた。この反応の仕方は本物のシニエルだとザウエルは直観的に気付いたのだ。自分の息子は死んでいなかった。スパイでもないだろう。その確信が持てただけで、ザウエルはほっとしたのだった。
「父さん」
シニエルは珍しくザウエルを「父さん」と呼んだ。会社で会うときは常に「社長」としか呼ばないシニエルには珍しいことだった。
「サンとユアンスには、管理棟にいたと言うように言われたんだ。でも、やっぱり僕はウソはつきたくない。爆発の時、タンクにいたんだ。タンクから工場が爆発するのをこの目で見た。見たんだ。爆発を。ごめんなさい。みんなを、みんなを、僕が、僕が殺したんです。ごめんなさい」と一気に、叫ぶように声を吐き出し、シニエルは、その場にうずくまって泣きながら床をかきむしっていた。
「どういうことだね。シニエル」
突然のシニエルの反応にザウエルは驚き、椅子から立ち上がると、机の向こうのシニエルの横に駆け寄った。いま息子は耐えられないほどの苦しみにさいなまれている。それを何とか救ってやらねば。ただそれだけだった。駆け寄るとシニエルの肩を抱いた。
「ユビリンk液を入れたんです。ごめんなさい。たくさん、たくさん。ラインを止めたくて」
「なんだって？　ユビリン？　まさか、ホスフィロムにか？」

すべてに説明がついた。ユビリンK液はホスフィロムの増量液だ。用量以上の増量があれば反応は落ちる。普通はホスフィロムSSの増量で対処するものだ。だがザウエルはユビリンK液の比率だけは厳格に管理していた。だから機器の反応率の低下と見て反応度を上げたのだ。だが圧力引火性のあるユビリンK液が不用意に増量されていたとしたら…。反応率を上げることが、そのまま爆発につながってしまう。
「増量したら…、もっと追加して、よけいに…効率が落ちて、それでラインが止まると…思ったんだ。……まさか父さんが…反応を上げるなんて。考えもしなかった。そんなこと…。だから、だから…」と、シニエルはしゃくりあげながら説明した。
「どうしてそんなことをしたんだ」とザウエルはあまりの出来事にシニエルに問いかけた。
「とうさんこそ、とうさんこそ、どうしてサートなんかに手を貸してるの？　あんな事しちゃいけない。いけないよ。どうして！」と、うつむいていたシニエルは泣き顔をザウエルに向けると、責めるような目で見た。
その目は「とうさんさえ悪い事をしなければ、僕だって、こんなことはしなかったんだ」と語っているようだった。
すべてが分かった。
いつの間にか、シニエルは、私と独立組織との関係を探り出していたのだ。
若いシニエルには、父親のやろうとしていることが犯罪にしか見えなかったのだろう。シニエルは汎宇宙政府が成立してから生まれた子だ。それも仕方ないことなのかも知れないとザウエルは思った。
「知っていたのか」とだけザウエルは答えた。「わかった。すべては私が悪かったのだ。

すまなかった。お前を苦しめてしまったね。もうウェイザーユニットは作らないよ。もう、遅すぎるのかも知れないけれどね」と、ザウエルはシニエルの肩を抱きかかえて謝った。
シニエルは、より一層大声で泣き、いつまでも、その泣き声が終わらなかった。

4

ことの顛末は、これでほとんどが明らかになった。サンもユアンスもシニエルが何かの工作をしたことを知っていたか勘付いていたのだろう。だからシニエルにすべてを背負わせるのではなく、共同責任にしようと事実関係をゆがめて報告したのだ。事件の規模はあまりに大きく、サンやユアンスはシニエルの精神的な辛さを軽減してやりたかったのだろう。全員の気持ちがよく分かった。
しかし、ただひとつ解決していない問題があった。スクランブルのかかった通信波の存在だ。スパイはどこかにいる、という事だ。
泣きじゃくるシニエルをユアンスに引き渡し、自室で休ませるように言った後、ザウエル自身も通信波の存在を確認していた。確かに、通信波は、この本社付近から発せられている。
いま、本社にいる人間は、ザウエルを含めてたった5人。
で、あるならば、答えは決まったようなものだった。ある意味、もっともあって欲しくはない答えだ。ザウエルは卓上のヴィディホを使ってユアンスを部屋に呼び出した。
「お呼びでございますか、ゴーズさま」

私のセカンドネームまで知っている。この人物こそが、おそらくはスパイなのだ。
「ユアンス、二週間ほど前に、二人でユミアミまで出かけたことがあったね」
「そうでございますね。島への侵入者を防ぐために島の周囲にヨロイス地雷を仕掛けてまいりました」
「ああ。あの時、私は先に帰ったが、ユアンス、君はユミアミに残って作業の残りを仕上げてくれたね」
「はい。二日ほど時間をちょうだいしました」
「その時何かあったんじゃないかい？」
「と申しますと？」とユアンスは不思議そうな顔をした。
その顔があまりに自然だったので、ザウエルはユアンスもまたスパイではないように感じたが、もう感傷に浸っている場合ではなかった。
「単刀直入に言おう。ユアンス。あの時、君は誰かに殺され、体を乗っ取られ、いまや警察のスパイにすり替わっているのではないか？」
こう、ザウエルが言葉を発した瞬間に、ユアンスの表情は、サッと変わった。柔和な顔つきが急に厳しくなり、ザウエルを問い詰めるかのように、
「ゴーズさま。あなたは、いやしくも、サメノの三賢者のひとりとうたわれた、サンザイス・ザウエル・ゴーズさまなのですよ。お気を確かにお持ちください。この私が本物か偽物か、あなたに見抜けぬ事など、あるはずがないではないですか！」とザウエルを叱咤した。
このセリフ、この口調。まさに四十五年間ともに相棒として時を重ねてきたユアンスそ

のもの。間違いなくユアンスはユアンスだった。
では、いったい誰がスパイだったのか？
その時、落雷があったかのような衝撃とともに、すべての真相がザウエルには思い出された。
「そうか、そうだったのか」
思わずザウエルは独り言のようにつぶやいていた。

5

時は一刻を争う。そう感じたザウエルは、一人で簡易中空艇を操り、ユミアミの島までやってきた。
「どうされたのですか、私もお供させてください」と、ザウエルの異変に気付いたユアンスの執拗な嘆願を振り切り、ザウエルは爆発後の工場跡にひとりで到着した。
ザウエルには分かっていた。いま、この場所にあの憎むべき宇宙政府の犬がいるのだ。逃しはしない。電波探知機が強くスパイ信号の存在を示していた。
ザウエルは、ゴーグルの形をした携帯型ヴディホをおもむろに被った。
二週間前にユアンスが仕掛けた、ヨロイス地雷の感知機能を、スパイが使っていると思われる波長に合わせて設定する。
ゴーグルの中でコントロールパネルが表示され、手指のジェスチャーで設定の変更が行えた。

これでスパイがこの島から出て海へ逃げ出そうとしても、近づいただけで波長を感知して地雷は爆発し、スパイは海に逃げることはできない。
次に、ヨロイス地雷をコントロールする管理信号波長を、スパイが使っている思われる「意識送信波」と同じ周波数にした。
この遠隔地雷ヨロイスは、ザウエル自身が設計したものだが、よくもまぁ管理信号に意識波を使ってモバイル設定するような設計にしておいたものだと思う。こんなところで意識波が役立つとは思いもしなかった。
この設定で、地雷は、常時ゴーズ重工本社と意識波で連絡し続ける事になり、スパイが活用している死体・本体間の意識波交信のうち、送信波のみが遮断される。
こうすればおそらく、死体にとりついたスパイは、受信により死体の中では活動できても、送信できない事から、離脱が不可能になり、その結果、死体の中に閉じ込められてしまうはずだ。
「ザウエルの匣」に光が閉じ込められるように、私の小さな幸せを壊そうとするスパイも、このユミアミの島に閉じ込めてやろう。身の回りの愛すべき者たちと、どこにもない確かなモノづくりをしていた環境を、亜空間サウザーなどという乱暴な仕組みで破壊した、汎宇宙組織の犬どもに、一つ所で、ていねにに、息を殺すかのように生きていく大切さを教えてくれよう。
ザウエルは、ヨロイス地雷の送受信設定が完了したことを確認しながら、爆発した工場跡に高濃度ユビリン液をまいて回った。
「ふふふふ。おかしなものだ。自分のことに一番気が付かないとはな」とザウエルは誰か

に語り掛けるように、独り言を言った。
「私の中に眠るスパイよ。ご苦労だったな。そう簡単に、サメノ三賢者のひとりを、乗っ取ることなどできはしないのだ」
そうなのだ。私だ。私こそがスパイだったのだ。あの研究室で意識を失った時。あの時こそ私が命を失った瞬間だった。ユアンスに強く名前を呼ばれて、やっと思い出した。
ユミアミの島でのホスフィロムＳＳの反応の悪さを改善するため、私は、島から持ち帰ったユビリンＫ入りのホスフィロムＳＳをそうとは知らずに実験に使ってしまっていたのだ。そしてホスフィロムが爆発した。少量だったので試験管が壊れた程度だったが、ホスフィロムは猛毒だ。生きていけるはずがない。私はそこで絶命した。
残留意識だけになった時、私の中に入りこんできた「意思」を感じた。強く、まっすぐな想いをもった実直な意識だった。
サメノ星系が誇るロマネ人やトード人にも勝るとも劣らない緻密で辛抱強い力を持った意識だった。
「この意識にだけは、私の体を乗っ取られてはならない」
ザウエルは直観的にそう感じたのだった。この強い意志に負けた時、サートのすべての秘密は宇宙警察に漏れてしまう。ザウエルは、そう確信した。
「どうあっても、スパイである君の意思を抑えつける事、それが私にできる唯一の抵抗だったのだ。そのためには、強く自分というものを持ち続けねばならない。そして、だからこそ、自分がスパイだとは気付けなかったのだ。そこに気づいたとたんに、秘密が漏れ、君に意識を乗っ取られると、わかっていたのでな。スパイ君、君とは、対話することもな

かったが、まぁ、この島で私の体とともに安らかに眠ってくれたまえ。そういう運命だったのだと諦めてな」
そう言うと、ザウエルは、「ザウエルの函」をランタンとして作動するよう設定してスイッチを入れ、あたりに撒かれたユビリン液の中に投げ入れた。
ボウ！　という低い音とともにユビリン液は独特のオレンジの炎を放ち、炎は猛スピードで工場跡に燃え広がって行った。
ザウエルは体全身に火が付き、その炎の中で意識を失って倒れこんだ。
そして、それと入れ替わりにザウエルの体にレビンの意識がよみがえった。
と同時に猛烈な熱傷の痛みが体中を襲っていた。
レビンは、このザウエルという死体から意識波離脱をしたかったが、それもザウエルによって封じられていた。恐ろしい男だ。このままでは、このザウエルの体とともに私の意識も焼かれて死んでしまうことになる。どうにか、この窮地を脱出しなければならなかった。
レビンは地面を転がり回って火を消し、あたりを見回した。がれきの中にホスフィロムＳＳのタンク室があり、そこに対防毒ガス用防護服が何着かそろっているのを見つけた。
レビンはあわててタンク室に近づき、中に入ると防護服を大急ぎで身にまとった。毒ガスを吸わないよう設計された機密性の高い服だった。
タンク室には防火壁があり、まだ火は回ってきていない。
やけどでうまく両手が使えなかったが、文句を言っている場合ではなかった。まず自分で防護服を着て、それから残りの防護服をありったけ抱えた。ウェイザー銃も設置されて

いたので手に取る。何かの役に立つだろう。タンク室の屋上まで上った。
まずいくつかの防護服から数本ベルトを外して、自分の防護服のベルトと、着ていない防護服の間を鎖のようにつないだ。
それから、ホスフィロムＳＳの配管を見つけると、それウェイザー銃で壊し、体にベルトでつないだ防護服のゴム手袋をはずして、袖をその配管に差し込んだ。
強烈な勢いで、防護服の中にホスフィロムＳＳが注入されていった。防護服がみるみるふくれる。
ホスフィロムＳＳは空気より比重が軽い。まるでゴムマリのようにふくれあがった防護服を配管から引き抜くと、袖の部分にふたたび手袋をはめてガス漏れを防いだ。
そんな作業を何回か繰り返していると、レビンの体は、とうとう浮き上がり始めた。ベルトを今度は近くの手すりに巻き付けて、充分な浮力がつくまで何度もゴムマリを作り続けた。火事の火がやってくるまでの時間勝負だが、ある程度の浮力がなければ脱出はできない。続けて次の「ゴムマリ」を作る。
「もういいだろう」
「ゴムマリ」を七つも作ると、レビンウェイザー銃でベルトを焼き切り、燃えさかるユミアミの島から、大空へと舞い上がった。
猛烈な勢いで空高く舞い上がりながら、レビンはユミアミの島に向かって、ザウエルへの追悼の意味を込めて敬礼をした。
「あなたのお嫌いな宇宙警察式敬礼で申し訳ない。しかし、あれほどの強い意思への敬意は、こう示すしか、私には他に方法がないのです。お許しください」とレビンはひとり呟

いた。
サメノ星系時間で七分二十四秒後にレビンは成層圏に到達し、意識通信の回復によってアイバニーＸＬへと離脱が完了した。十五分六十五秒後には、空中捕獲触手でザウエルの体が船内へと保管された。

しばらく休息をとるように伝える。
続いて

「そうですか。明日はユミアミ島の出荷日でございます」

「いま帰ろうと思っていたところだ。ユアンスこそ、いつまでも書類整理をしてちゃいかんぞ」とザウエルはユアンスに微笑んだ。
「私も帰ろうとしていたところです」とユアンスも微笑んで「おやすみなさいませ」とドアを閉めた。